
七英雄物語 外伝

七英雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七英雄物語 外伝

【Zマーク】

Z9932B

【作者名】

七英雄

【あらすじ】

現在連載中の「七英雄物語」の外伝を掲載していくと思います。思い立つて書きますので、掲載は不定期となります。特に注目もされなかつたキャラが主役となります。誰が出てくるかはお楽しみです。本編と並行して読んで下さい。更新が怠つております。申し訳ありません。

外伝1 「スライの孤独な戦い」（前書き）

本編第1部前半に出演し、僥ぐも死んでいった将軍、スライが若かつた時の遭遇した出来事を外伝として掲載します。

外伝1 「スライの孤独な戦い」

バロゲニアガルドといつ世界は8つの国で成り立っている。

北にある孤島、ゲルニアという国は、8国の一つである。平和なその国は戦争もなく日々を陽気に暮らしていた。

ガルド歴901年、16歳になる少年は島で一番大きな山、アル山を目指して森の中を歩いていた。少年の名はスライといった。ゲルニア国の王セラミスに仕える将軍の息子になる。

いうなれば、次期将軍ということになるが、まだ好奇心旺盛少年のスライは冒険と称してウロウロと遊び歩いていた。

悠々と暇さえあれば森の中を探索していた。

毎日入っている森の中である。空気の流れや、変な雰囲気を察知することは出来るようになっていた。今日は森が騒いでいる。

ドン。

大きな音が響いた。今まで聞いたことのない音。その音は一定の時間差で響く。まるで歩いているような音だった。

スライはまだ使い慣れない剣を抜いて構えた。

足音はますます大きくなり近づいてくる。スライの頬を汗が流れる。手が汗で緩む。

スライの目の前に現われた物は。

人の腕ではないドス黒い腕、皮は爛れ、爪は長く鋭い怪物だった。

「…っ！」

スライは驚愕した。

世界が作られる前に、太陽の神と絶望の神が争い、太陽の神の勝利となつた。絶望の神は復讐を誓つた。その絶望の神が戦いの時に召喚した異形の怪物。それが絶望獣ジャムと呼ばれている。

こんな孤島になぜ？それはこのゲルニア国の王セラミスの実験だったのである。セラミス王は人間と獣の融合を夢見て人知れず実験

を繰り返していたのだ。その結果召喚に成功した一体がこの獣なのである。

人々を恐怖へ導いた絶望の神。その獣ジャム。それが今、この平和な北の国に。1人の少年の前に現われたのだ。

絶望獣ジャムがスライの前に立ちはだかつたのはいいが、攻撃をするわけでもなく、ただ静かにじつとスライを睨みつけていた。まさに蛇に睨まれた蛙のような状態である。スライは一歩も動けない。今にも剣を落としそうだ。なんとかそれを堪えているが、手から離れるのは時間の問題である。

スライの頭には真っ先に逃げることを優先的に考えている。

ゆっくりと後ろに下がろうと足をズラし始めた。

突如ジャムが逆方向へと走り出した。

スライは心底震えた。なぜなら、その先は村があつたからだ。守らなければ。スライの脳裏に浮かんだ言葉。同時にスライはジャムを追いかけていた。

「あんなデカイだけの犬つころに俺が負けるか！」

少し勘違いをしているが、スライは覚悟を決めた。

追いかけながら、手に取った木の枝をジャムに投げつけた。枝は見事ジャムの頭に命中した。ジャムの動きが止まる。スライも同時に止まつた。再び構える。

ゆっくりと、ジャムが振り返つた。その目は怒りに満ちていた。

「…犬つころ？」

スライは呟いた。

キシャアアアー！絶望獣ジャムの雄叫びが木靈した。

もしかしたら、後悔という2文字がスライの脳裏を駆け巡つたのかもしれない。スライの身体は更に震えだした。

同時にまだ「犬」という意識があつたのかもしれない。なんとか震えを止めようと必死になつていた。

キシャアアアア。そんなスライの思いとは別に戦闘体制が整つた

ジャムはもつと大きな声で雄叫びを上げた。

「ううう」

スライは唸つた。もはや攻撃をすることなど考えていない。逃げることだけ。回避することだけしか頭にない。

ジャムの大きな身体だけに集中する。一瞬の動きも見逃さない。

「うわっ」

スライは慌てて飛んで避けた。間一髪腕はスライの身体を力こすつただけだった。

スライの考えたことは、自分を追わせて村から遠ざける方法である、

ジャムはスライへと標的はを決めていたようだつた。そうなれば後は逃げるだけである。スライは心中で逃げ出す瞬間を数えていた。

「いち……にの……」

今にももう一撃を放つてきそうな雰囲気である。

「さん！」

同時に走り出した。

だが、それに反応したのはジャムの方が早かつた。
一瞬で前に回りこまれたのだ。

スライは驚愕した。予想外だつたからだ。

キシャアア。雄叫び。スライは改めて恐怖を感じた。
逃げられない。やるしかない。スライは剣を構えた。

絶望獣は全く氣にもせずに鋭い爪をコラコラとスライの前で振つてている。

そこに一瞬の隙があつた。スライは交差する腕の合間に見切つた。スライは剣を突き立てた。剣は絶望獣の身体に突き刺さつた。

グシャア。今度は悲鳴だつた。絶望獣が苦しむように暴れだした。

「やつ・・やつた」

スライは剣を離し、数歩後ろへ下がつた。

雄叫びをあげ続けるジャムは暴れながら突き刺さつた剣を持つた。

そして勢いよくそれを引き抜いた。

「あ…」

スライは青ざめる。肝心の自分の武器がジャムの手に渡り、それを目の前で粉々されたのだ。油断だった。あの時点で勝利を確信したスライが迂闊だったのだ。何がなんでもあの場面は剣を話すべきではなかつた。

ジャムは落ち着きを取り戻し、再度スライを見た。今度はその目に怒りも加わつてゐる。

「…ううう」

スライは震えだした。もう自分の武器は何もない。抵抗する術がないことに未来が消えたことを悟つた。

スライは次の手も思いつかぬまま、動くこともできなかつた。ジャムが近づいてくる。もう勝利を確信している。

スライは覚悟を決めていた。自分の死を。静かに目を閉じる。瞬間。

目の前に景色が広がる。

王、セラミスが手の平に火の玉を作り上げるのを。それは魔法だということに当時小さかつたスライは理解できなかつた。

しかし。

今は理解できる。スライは見よう見まねで手の平を差し出した。赤く輝き、小さな火の玉が飛び出した。それは、火の魔法。スライはたまらず火の玉をジャムに向けて投げつけた。

火の玉は勢い良くジャムに命中した。熱い。ジャムが思わず悲鳴をあげる。

「うあっ、やつた」

スライは思わず声を出した。ジャムの睨むような視線。スライは慌てて同じように火の玉を出して、投げた。

なんとかこの繰り返しをしていくしかない。

だが、魔法とは心の力である。そうそう連続して出せるはずはない。常に不安と隣りあわせなのだ。心の力も弱まる時がくる。

段々と火の玉の大きさが小さくなつていいく。弱まつてゐる証拠だ。

スライは最後の賭けに出た。

一撃に賭けるしかない。スライは集中する。このまま同じような攻撃をしても埒があかない。

：であれば、最大の大きさで火の魔法を出すしか道はない。心を大きく。火を炎に。元々集中力には自信のあつたスライである、すぐ自分的世界に入り込んだ。

気持ちを落ち着かせる。心中に大きな火の玉が描かれた。手元が熱くなる。出た！大きな炎。ジャムは飛び掛ってきた。

今だ。スライは魔法を発動させた。

炎はジャムの身体を包んだ。耐久力が強い絶望獣ですら、悲鳴の雄叫びをあげる程の威力。もう逃れられない。ジャムは大暴れしたあとに、崩れ落ち、その身体は消え去つた。

「…や、やつた」

スライも倒れこんだ。今は動けない。達成感だけが残る。村を、国を守つたという気持ちだ。

「ふつ、ふはつ、あははは」

スライの大きな笑い声がゲルニア国に木霊した。

完

外伝2 「赤い髪の少女」 タイトル（前書き）

暗殺者のカインズといづ（現在第3部にも出演）女の少女時代のお話です。寂しい運命に翻弄される彼女の活躍です。

外伝2 「赤い髪の少女」 その1

赤い髪の少女は親の顔を覚えていない。

捨てられたのだ。孤児院の前で「ミミ」のように置き去りにされたいた。

元々その孤児院 자체そういう捨て子だけを引き取っていた所だつたために少女も何の疑いもなく引き取られた。

そして、数年後少女は成長し、町を彷徨つていた。

華やかな町の裏は黒く濁つており、人を殺すことなどなんども思わない輩の集りだつた。

赤い髪の少女の容姿は決して醜いことではなく、むしろ行く人が振り返るほどの美しさを持っていた。

こんな裏町で1人歩いていることは危険極まりない。少女といえども女だ。身体を狙つて襲つてくる奴らもいるだろう。

少女が彷徨つていると、3人の男が少女を囲んだ。

「やあ、嬢ちゃん、こんな所に何の用かな？」

「ここは危険だよ、お兄さんが送つてあげるから、家を教えて」

「それとも…へつへつ…別の目的かな…？」

生きていくためにはなんでもしなければならない。例えそれが子供でも甘えは許されない。10代前半の女の子でも我が身体を使って客を取つている者もいる。

この少女も同じ類の人間だと思われたようだ。

「なあ、嬢ちゃん、いくらだい？」

いやらしく男は問い合わせる。

少女は俯き肩を震わせた。

「あれ、あれ？俺達が恐いのかな？大丈夫優しくしてやつからよ、

「へへつ」

もう1人の男も笑いながら言つた。

「くつ、くつ、くつ」

別の笑い声。女の声。少女の声だった。

肩を震わせていたのは恐怖からではない。
笑いを堪えていたのだ。

「なにがおかしい」

不機嫌になつた男達は声色を急に変えて睨んだ。

少女はニヤけた顔を男達に晒した。

「相手してやつてもいい。但しあたしは高いよ」

男が少女の胸倉を掴んで捲くし立てた。

「調子に乗んじゃねーよ、このクソガキ、てめえ如きに払うモンなどあるかあ」

「…うつさい」

少女は呟いた。

「…はあ？何か言つたか？」

「…臭い息を吹きかけんな、立ち眩みする」

少女は同時に男を蹴りつけて掴んだ手から脱出した。

「こつこのガキ」

「あたしはガキじやない、ちゃんと名前がある。あたしの…」

言いかけて少女は口を閉じる。

「ま、いいか」

そう言うと少女は、護身用に持つていた短剣を抜いて、一閃。

男の首を切り裂いた。血が止まることなく飛び出して、男は倒れた。

少女は既に次の男へ向かつていた。

「なつなんだ、こいつ」

男が拳を振り上げたが、それは遅い行動だった。

少女の短剣は胸に食い込んだ。

「がつ…つ…」

心臓への一突き。即死だつた。

「…あとひとり…」

少女は立ち上がりつて残つた最後の1人を見る。

「…ひり…」

男は慌ててその場から逃げ出した。

真っ赤な返り血を浴びた少女はしばらく動くことはなかつた。

「…あたしの名前は…、カインド」

誰もいないその場所で赤い髪の少女は呟いた。

つづく

外伝2 「赤い髪の少女」 その2

赤い髪の少女、カインドは好きで人を殺したいわけではなかつた。生きるために女であることは、相当な苦労を強いられるのだ。命を狙われることもあるれば、今回のように身体を狙われることもある。

身寄りがないため、全ては自分を守るために仕方がないのだ。いつからか、それは通り魔の噂になり、『赤い髪の魔女』と、人々から恐れられる存在になつていつた。

当然国からカインド討伐の話も持ち上がり、腕自慢の戦士達が我こそはとカインドを探しに向かい始めた。

カインドの運命は逃れられない歯車に巻き込まれることになる。彼女の願いはただ平和に暮らしたいだけなのに。

討伐の動きが出たとカインドの耳に入つてきた。

だが、その時点で既にカインドは2人の戦士と対峙していた。情報が耳に入る前に、国と少女の戦闘は始まつていたのだ。

1人は剣こそが最大の武器だと名乗るヘルヘスともう1人は槍こそが最強の武器だと言い切るメシャエ。

対するカインドの武器は短剣だけである。それでも、彼女はゴロツキ相手に恐れられる存在にまで成り上がつていた。

油断はできない。ヘルヘスとメシャエは心に誓つた。

「赤い髪の魔女が、こんな子供だとはな…驚きだ」剣士ヘルヘスが呟いた。山のような大男は巨体を揺らしながらカインドの前に立ちはだかつた。

その圧倒的な威圧感にカインドは今までの相手とは違うことを悟

る。

「ですが、油断は禁物です」隣にいた槍使いのメシャエが忠告する。ヘルヘスとは反対に華奢で弱々しい。だがその細い身体が柳のようになしやかに動くのだろうとカインドは想像する。

「…だな」ヘルヘスは剣を抜き、構える。

カインドは命の危険を覚えた。

「あたしが何をした？自分の身を守るためにしたことが罪なのか？」

カインドは怒り交じりで訴えるように言った。

「そんなことはお前の姿を見ればわかる。赤い髪の悪魔などはただの噂ということがな」ヘルヘスは言った。「だがな、もうそれだけでは、話は收まらないんだよ、國から命令が出た、それはどうしようもない事実なんだ」剣をカインドの前に突きつける。

「お前は、俺達と戦う。それ以外に生き残る道はない。いや、これからもな」

カインドは何も喋らなくなつた。

「いや、正々堂々と、戦え、赤い髪の…戦士よ」

「…そう…だな…。戦うしか…道は…ないのだな」

瞬間、カインドの身体が美しく舞つた。

戦闘開始の合図であつた。

カインドには1対1という確信があつた。槍使いのメシャエが同時に襲つてくることはないと。ヘルヘスの「正々堂々と」という言葉があつたからである。であれば、勝算はある…とカインドは僅かな望みを託した。

「ぬつぐ」ヘルヘスの動きはカインドの素早い突つ込みにからつじてついてこれた。

「速い」遠くでメシャエが驚いた。

「ちつ」この一撃を狙っていたカインドは避けられたことに焦りを感じる。

突撃で避けられたあとに残っているのは、反撃である。体勢が整つていない状態での反撃は極めて危険であった。

ヨロヨロとカインドの身体がふらついた。

見逃さずにヘルヘスが襲い掛かった。

「覚悟つー！」数々の修羅場を潜つて来たヘルヘスはこの一振りで全てが終わると思った。それほど自信のある渾身の一撃だった。

…が。倒れたのは、崩れ落ちたのは、ヘルヘスだった。

「なんだとつ？」

メシヤエが叫ぶ。ありえない現状に驚きを隠せない。

「ぐつ…はつ…」ヘルヘスの胸から鮮血が舞い上がる。「なん…だ。なにを…した」

肩で息をしながらカインドは何が起こったのかわからない表情でヘルヘスの傷を見た。

「…」これは…

理解できぬ」とにカインド自身も不安にうわれた。

「おおおおつ！」

同時に槍を持って突っ込んできたのはメシヤエだった。細い身体に力が入ったのがわかる。かつてない瞬発力とともに、飛び出した。先程まで剣の間合いで命のやり取りとしていたのだ、本当の戦争経験のないカインドにとつて突然の武器が替わることに対しても素早い対応は効かなかつた。

「しまつた！」

剣であれば、かわせるはずの間合い。槍ではそうはいかない。剣よりも遙かに長い槍はカインドの肩を捉えた。

「もうつたあ！」

メシヤエの攻撃はここでは終わらない。槍を抜くと更に連続で槍を繰り出した。

「ぐうつ」

槍はカインドの身体を貫くのかと思われたのだが、パキンと音を立てて槍の先が折れて宙を舞つた。

「…えつ」

メシヤエが間の抜けた声を出した。

間髪いれずカインドの短剣がメシャ工の胸を突き刺した。

「がつ…」

死を前にしたメシャ工の脳裏には何が起こうたのかわからなかつた。

なぜヘルヘスの渾身の一撃が決まらなかつたのか。
なぜメシャ工の槍が飛んだのか。

薄れゆく意識の中メシャ工の疑問は解決出来ぬままメシャ工は永遠の眠りについた。

「はあ、はあ、はあ」

カインドは返り血を浴びたまま息遣い荒くその場にへたり込んだ。

ヘルヘスも動く様子がない。息絶えたのだろう。

「あ…あたしは…何者なんだ…」

両手を見ながらカインドは誰にも聞こえない声で呟いた。

つづく

外伝2 「赤い髪の少女」 その3

屈強なる2人の戦士が少女に倒されたという話は瞬く間に知れ渡り、懸賞金も桁違いに跳ね上がった。

結局カインドは自分で自分の首を絞めたようなものになった。

後日、討伐の御触れは国中に発信され、カインドはますます気の抜けない生活を余儀なくされた。

それから、数カ月後。

カインドはまだ捕まつていない。襲い掛かる刺客達を深手を負いながらも次々と撃破していく。

カインドを凶悪視する意見と英雄視する意見と分かれ始めていた。そんな時、1人の男が立ち上がった。若きその男は、カインドを自分の部下にするべく討伐を進み出たのだ。

その男の名前は、マルーンといった。

あまり名の知れないその男は、貴族でもなんでもないため、国としても死んでも問題ないだろうという判断だった。

街外れで、カインドとマルーンは出会った。

マルーンを睨みつけるカインド。だがそれにはマルーンは動じない。
まるで動物を眺めているマルーンの表情にカインドは怒りを覚えた。

今までは彼女の方から攻撃を仕掛けたことはなかつた。だが、今回は初めて彼女の方から仕掛けたい衝動が湧き上がつた。

「何を見てる?」

「…」

「おいつ！てめえ！なんとか言え」

「いや…綺麗な赤い髪だと思つて…」

静かな水辺を連想させる美しい声だった。

「……なつ……」

カインドは絶句した。

過去にそんなことを言われたことはなかつた。

カインドは躊躇した。

今まで対峙した男達はカインドの身体狙いか、命狙いの人間だけだつた。

だが、今この目の前にいる男は、そんな類の男じゃない。カインドを全く恐れていないその笑顔はカインドの闘争本能を消してしまう力があつた。

「今日は頼みがあつてきたんだ」

マルーンは優しい声で話しかけた。

「頼み…？」

「いざれこの世界の頂点に立つこの私に力を貸して欲しい」
カインドの頭は混乱した。何を言つてているのだ？この男は？
「話が見えない。どういうことだ」

カインドは短剣を抜いて威嚇した。マルーンの笑みは消えない。
「ふざけるな」

カインドは飛び掛つた。だがマルーンはカインドを見据えて呴く。

「君の力を私に貸してくれ」

「だつ黙れ、黙れえ！」

完全に動搖を隠せないカインド。

「君のその能力はいつか必ず役に立つ」
マルーンの言葉にカインドは止まる。

「の…能力？」

「気づいてなかつたのかい？君のその特殊能力。数々の刺客を倒してきた能力」

カインドは思い出した。

初めて対峙した刺客を倒した時のこと。あの時の襲われる寸前にメシャエの槍が折れ、ヘルヘスの胸を貫いた時のこと。
「気付いていなかつたのか？」

マルーンは言う。

「…」

「カインド、君は、君の能力は、身体の一部を刃にする能力
カインドはキヨトンとする。

「な…なんだと？」

「無意識でやつたのか…さすがだな」

マルーンは感心した。

「その力が欲しい。君の一族は、暗殺の一族。代々伝わるその力を、
この私のために使って欲しい」

「一族…？」

「私の新しい未来のために」

マルーンの切望する瞳はカインドを捉えて離さなかつた。

「あ…う…」

カインドは言葉が出ない。

ここまで、自分の力を欲しいと言つてくれる人間は今までいだ
らうか？

ここまで自分の力を期待してくれる人間はいだらうか？

「さあ」

マルーンを手を差し延べる。

「…」

しばらく無言の後、カインドは笑う。

そして…。

赤い髪の少女、赤い髪の悪魔は忽然と姿を消す。

彼女は一体何処へ消えたのか…。

それはマルーンのみが知る。

彼の野望に利用されたのか、もしくは、彼女の望み通りなのか…。少女は大人になり、いつかまた目の前に現われるだろう。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9932b/>

七英雄物語 外伝

2010年10月8日22時40分発行